

この絵の向こうに世界を見る

岡山城東高校 2年 秋山花帆

アルプスの真昼という絵画がある。広大な草原に、青い服を着た女性と羊の群れが描かれた穏やかな絵だ。セガンティーニが描いたというこの絵は、現在私の住む岡山県の大原美術館で展示されている。私はこの絵を見る時間が大好きだ。壁に飾られたこの絵の前に立つと、そこに描かれた百年前のアルプスと自分の世界が繋がっていることを実感する。この絵がスイスで生まれ、日本のこの地までやってきた過去を愛しく思う。そして今日この瞬間も遠いどこかで「誰か」が生きているのだ、とその姿に思いを馳せる。その想像の世界旅行から岡山の美術館の一室に帰ってきたとき、私はいつも絵の中の女性に見つめられている。彼女に、明日の私はこの世界でどう生きるかと問われている気がするのだ。

アルプスの真昼に限らず、かつて全ての風景画や風俗画は人々に世界を伝える存在だった。私たちが生きる現代社会では安全に配慮された飛行機や船に乗り、気楽に海の向こうへ旅することができる。もちろん誰もがどこへでも、と言うわけではないが今や海外旅行は一般的な余暇の一つだ。しかし今ほど技術が発展していない時代では、国外旅行は一部の人間の特権であり危険も伴うものだった。高精度な写真もないのだから、一般の人々にとって「この海の向こうには陸地があって、そこには私たちと全く違う文化を持った人たちが暮らしている」という知識は実感を伴った考え方ではなかったはずだ。私たちが「人類は月に降り立ったことがある」だとか「近い未来、宇宙旅行も可能になる」などという文言に覚える途方ない感覚を、昔の人々は海の向こうに感じていたのではないだろうか。国外に限ったことではない。交通機関が発達した時代において、同じ国の中でも遠く離れた行けるはずのない土地があっただろう。その人々にとって、風景画や風俗画は特別な存在だったと思うのだ。遠い地で画家として生きる「誰か」が描いた世界の一部。日常が切り取られたこともあれば、雄大な自然や人工的な町並みが描かれたこともあった。そのすべてが「誰か」の目を通したまだ見ぬ世界だったのだ。過去に生きた人々はそこに自分と世界のつながりを感じていたのではないだろうか。その地の存在と今日もそこで「誰か」が生きていることを実感し、そしてその実感は自分と「誰か」を繋ぐ。共に一つの世界で生きられる。遠い地の「誰か」は画家一人に限った話ではない。絵画に登場する人物のモデルだってそうだし、田畑や建築物・生活用品が描かれているのならばそれを作り、使っている「誰か」もいるだろう。絵画の外に目を向けると、絵を購入した人、運んだ人、自分と同じく鑑賞した人などと数え切れないほどの人間がいる。その時までその絵画が関わってきた全ての人が過去を生き今日を生きているのだ、この世界のどこかで。きっと壮大で、新鮮で、愛おしい感覚だっただろう。

現代では、あらゆるメディアで毎日のように海外のニュースや観光情報を目にする。誰もが質の高い写真や映像を撮ることができるので、世界中の景色を把握することも難しくない。そんな今を生きる私たちにとって、世界が海の向こうまで続いていることは当たり前だ。当たり前すぎるからこそ、遠い地に生きる「誰か」の存在を強く意識することが少ないのではないだろうか。今日も世界のどこかで沢山の「誰か」が歩き、笑い、努力し、傷つき、生きている。私と同じように「誰か」の存在を思っている「誰か」もいるだろう。その「誰か」の想像に恥じない生き方を選ぶこと。この選択は社会は少しずついい方向へ導くと思う。その先には、思わず絵に残したくなる美しい世界が待っている。

アルプスの真昼に描かれた女性は今日もこちらを見つめている。遠い地で生きたその「誰か」の眼差しに、私は応えたい。